

【資 料】

夜間緊急入院した子どもの同胞に対する父親の思い

田 川 紀美子*

【要 旨】

本研究の目的は、夜間救急外来受診後入院となった子どもの同胞に対する父親の思いを明らかにすることである。同意の得られた父親8名を対象とし、半構成的面接を行った。その結果、以下のことが明らかになった。

1. 『成長に気づく』『生活リズムが大切』『母親役割の必要性』『良いこととを感じる』『いつもと変らない』『気を遣う』という思いを抱いていた。
2. 子どもの入院が短期間であっても、プラスとマイナスの影響を同胞へ与えると考えていた。
3. 同胞が幼児期の父親は『良いこととを感じる』、学童期以降の父親は『いつもと変わらない』という思いを抱いていた。
4. 父親は、入院時のみ同胞の生活リズムの乱れを気にしていた。これらのことより看護者は、短期間の入院であっても父親がさまざまな思いを抱いていることを念頭に置き、支援していく必要がある。

【キーワード】救急入院、同胞、父親の思い

はじめに

家族のなかで誰かに病気が発症すれば、心理的・社会的にもほかの家族員に影響を与える（柴原、深瀬、小山、2002）と言われている。小児看護においても例外ではなく、子どもの病気がきっかけとなり家族関係に変化が生じることもある（中野、2000）。全国の300床以上を有する総合病院で行った調査では、76%の家族が子どもの付き添い入院をしており、その家族のうち95%が母親であったと報告された（筒井、1993）。太田（2002）は母親が入院児に付き添うことによる同胞への影響について、いつもと違う環境におかれても子どもなりに頑張ろうとするが、突然の環境の変化による同胞の精神面への影響は大きいと述べている。このように、母親が入院児に付き添うことによる同胞への影響については幾つかの報告があり、同胞への支援の必要性も言われている。

現在、子どもの人口は減少しているが、小児の救急患者数は増加しており、入院の適応基準が異なるとはいえ小児の入院数に占める救急患者数は高い（田原他、2001）。また、小児科病棟の入院数の47.1%が時間外入院であったとの報告もある（渡部、福田、渡辺、前田、清水、1998）。このような現状

の中、夜間救急外来を受診した子どもの特性や受診の理由・動機・主な症状についてはすでに明らかになっており、夜間救急外来を受診した約半数の子どもに同胞がいることも明らかになっている（辻他、1996；松原、成瀬、1999）。実際子どもが緊急入院した場合、突然の出来事に家族は対処していかななくてはならない。田中（1998）は、子どもの病気などの変化が起こりそれを家族が丸手となって対処した場合は、家族員個人がもっている力の総和よりもさらに大きな力が発揮されると述べている。また、子どもの病気がきっかけとなって家族関係に緊張が生じており、看護者からのケアを必要としている場合が多い（中野、2000）とも言われている。

その一方で、小児看護に携わる看護者は家族へのかかわりに戸惑いを感じており、その一因は家族の状況を理解できないことにある（筒井、2000）との指摘もある。父親の対処行動の特徴として、自分にできることを考え解決する自己コントロール法をとるとの報告もある（Heaman, 1995）。このため父親は何を考えているのか理解しにくい存在だと思われる。

現在長期入院児や慢性疾患をもつ子どもやその家族に焦点を当てた研究は数多くされているが、その

* 日本赤十字広島看護大学

表 1. 対象者の特性

	年齢 (歳)	職業	同胞の 年齢 (歳)	患児の 病名と年齢 (歳)	入院 から面接 までの期間 (日)	患児の これまでの 入院回数 (回)	同胞の 入院経験の 有無	普段の 子どもと のかかわり	母親の 職業の有無
対象 1	41	公務員	4	喘息様気管支炎 (2)	5	0	有	積極的にかかわる	有
対象 2	35	会社員	8, 3	喘息様気管支炎 (6)	2	0	有	休日にかかわる程度	無
対象 3	37	会社員	7	急性胃腸炎 (3)	3	1	無	休日にかかわる程度	無
対象 4	39	会社員	15, 8	頭部外傷 (12)	3	0	無	休日にかかわる程度	有
対象 5	38	会社員	12	偏頭痛 (9)	3	2	無	休日にかかわる程度	有
対象 6	35	公務員	9, 7	蕁麻疹 (5)	2	0	有	休日にかかわる程度	無
対象 7	35	会社役員	6, 5	不明熱 (3)	6	0	無	単身赴任中のためか かわりが少ない	無
対象 8	45	会社員	11	喘息様気管支炎 (3)	4	多数	有	休日にかかわる程度	有

ほとんどが母親を対象としたものである。小児病棟の入院のうち慢性疾患は時間内に予約紹介入院し、急性疾患は時間外入院という二分化を認めた（渡部他, 1998）との報告がある。小児では感染症などの急性疾患であれば短期入院が予測され、夜間救急入院の患児は短期入院の場合も多いと考えられる。また、子どもの入院期間は1週間以内が約30%を占めるといわれており、早期からの家族支援が必要といえる。そして家族支援を考える上では、看護者の目にとまりにくい父親と同胞にも着目する必要があると考えた。父親に関しては、病気を持つ子どもの父親の現状や、子どもの入院にともなう父親の役割の変化などについて研究がなされている。救急外来受診では、父親が帰宅し患児の状態を見て不安に思い、受診を促すケースも少なくはない（大久保, 井口, 山岸, 1996）との報告もあり、父親が家族とかかわる可能性が大きい。また、夜間緊急入院となるとまずは家族で対処しなくてはならず、父親が同胞と家で過ごすことも少なくない。これらのことより、日中の入院に比べ父親が同胞とかかわる可能性は大きいと考えられるが、その現状や父親の思いは明らかにされていない。父親の同胞への思いを明らかにすることで、看護者の家族へのかかわりに対する困難さを軽減でき、目にとまりにくい父親や同胞を含めた家族支援を行うことができると考えた。そこで本研究では、夜間緊急入院となった子どもの同胞に対する父親の思いを明らかにすることを目的とした。

研究方法

1. 研究対象

A病院に夜間救急外来を受診した後入院となった子どもの父親のうち、入院した子どもに同胞がおり、本研究に同意の得られた8名を対象とした。対象の選択は、子どもの付き添いをしている家族から同胞の有無、入院時間帯を聞き、研究対象の条件を満たし、かつ面接当日に来院した父親とした。

父親の年齢は平均38.1歳（SD=3.5）であり、全ての父親が有職者であった。入院している子どもの年齢は平均5.4歳（SD=3.3）で、その同胞の年齢は平均6.9歳（SD=3.5）であった。子どもの数は2人が4名で、3人が4名であった。家族構成は核家族が7名で、拡大家族は1名であった。子どもの入院日から面接日までは平均3.5日（SD=1.4）であった。面接時の子どもの容態は全員落ち着いており、7名は入院期間について1週間程度と医師より説明を受けていた。対象者の特性は表1に示した。

2. データ収集期間

平成15年8月～平成15年9月

3. データ収集方法

半構成的面接法を用いて対象者へインタビューを行った。インタビューは、対象者が面会などで来院した際に病棟内で行い、対象者の同意を得てMDブ

レーヤーにより録音を行った。対象者1人に対して1回のインタビューとし、1人当たりのインタビュー時間は平均22.3分(SD=3.0)であった。インタビューの内容は、家族構成などに関する家族の属性、入院が決定した時の子どもの状態や同胞の様子などに関する子どもの入院時の様子、入院後の同胞の生活、同胞と入院児との関係などに関する入院後の家族の変化、対象者の入院に対する思い、入院による対象者への影響などに関する対象者自身について、などを含めたものとした。

4. データ分析方法

面接で得られたデータをもとに逐語録を作成した。また、面接中に対象者の表情や態度を観察し記録にとどめた。これらをもとに、対象者の同胞へのかかわりや思いについて語っている言葉に着目し整理したのち、内容の共通性を明らかにしていく方向で帰納的に分析を行った。分析の際には妥当性を高めるために、小児臨床経験があり、同様な方法を用いた看護研究を実践している者と意見交換を行いながら進めた。

5. 倫理的配慮

対象者には文書と口頭により、研究の主旨や所要時間などの説明を行い、あわせて研究成果の公表についても承諾を得た。その後、対象者の家族に対しても研究の主旨や所要時間などの説明を口頭で行った。本研究への参加は自由であり、拒否・中止に関しては対象者の意志を尊重し、治療・看護等において不利を被ることがない旨を説明した。また、得られたデータは本研究にのみ使用し、個人名や会話の内容などは本人と特定できないように配慮した。

結 果

父親が面接で語った内容を分析した結果、父親は同胞とかかわる上で次のような思いを抱いていることが明らかになった。患児や同胞の入院経験、患児の疾患などの状況はさまざまであったが、それらによる差異は認められなかった。また、父親は普段より同胞とのかかわりが増えたと感じ表現していた。

1. 『成長に気づく』

父親は、同胞の行うお手伝いや同胞同士、また入院児への接し方について、思いやりや気遣いを感じ、それを同胞の新たな一面と捉え、同胞の成長を感じていた。その成長は、子どもの入院によって父親が感じた嬉しい同胞の変化であり、父親は率直に

喜びを表現していた。

「特にやっぱりお母さんが居ないんで、あのー私がやっぱりお母さんの役も掃除も洗濯もご飯も全部やってるんで割と気は遣ってくれてます」(対象2)

「姉としての自覚というか、特別あのー、大きな事をしたとかいう事はないんですけど、思いやりとかね、そういった部分でうん、少しは自覚が出てきたんじゃないかと思いますね」(対象5)

「結構ね、しっかりしてましたね。(中略)普通だったらもうちょっとわがまま言いそうなんですけど」(対象6)

2. 『生活リズムが大切』

子どもの入院によって乱れる可能性のある生活リズムを、ある程度一定に保ちたいと願う父親の思いが表れていた。同胞の生活のリズムを乱す原因として、いつも面倒を見ている母親が不在であること、子どもの入院時間が夜間であったことが表現され、この思いには夜間帯での入院が関連していた。しかし夜間緊急入院の影響は入院中続くのではなく、入院した時に限定されていた。

「一日の流れ(の中)で、外で汗かく時間、勉強させる時間、お昼寝する時間、いう時間を大体大まかには頭では決めてますね」(対象2)

「生活が乱れないような、いつもの様にするように心掛けるだけです」(対象8)

「(入院が決まった時同胞は)椅子にね1人で座って(中略)眠たかったみたいで(中略)眠たい眠たいとは言っていました」(対象3)

3. 『母親役割の必要性』

父親は、生活全般について今まで母親が家庭で行っていた役割を、父親自身が同胞と過ごす上で必要だと感じていることを表現していた。また、母親の役割を家事だけとは捉えておらず、同胞とのかかわりも母親の大切な役割の一つと認識していた。

「食事も洗濯も風呂も入れて、でなかなか寝ないですから、まあ普段のやっぱり妻の苦勞が身に染みましたね」(対象2)

「いつもね、家でずっとお母さんとね、しゃべってますからね、子どもはね、その分なんかいろいろしゃべらにゃいけないのかなっていうのは」(対象6)

「女房がやってる事くらいは同じようにできると思うし、仕事も休んでますからね」(対象7)

4. 『良いこととを感じる』

これは同胞が幼児期の父親が語った思いであった。子どもの入院によって生じた普段とは異なる同胞との生活について、同胞にとって良いことがあったと感じそのことを表現していた。また父親は、子どもの入院という出来事を通して、普段気づいてはいたが対応できていなかったことを行い、同胞を満足させたいと感じていた。そして普段とは違う生活の中で、あえて楽しみを設けようとする思いが表現されていた。

「彼女（同胞）今嬉しいんじゃないかな、自分に1対1でついてくれるから」（対象1）

「大体外食をするか、好きなものが食べられるし、楽しい方が多いみたいです」（対象7）

5. 『いつもと変わらない』

これは学童期以降の同胞の父親が表現していた。父親は、普段の生活と子どもが入院してからの同胞の生活との変化について比較して考えていた。しかし父親は、子どもの入院は特別なことではなく、同胞の生活や言動など全てにおいて普段と変わらないと感じ、そのことを語っていた。

「家がだいたい、共働きしとるんで、誰もおらん時間帯があったり、片方だけだったり、普通がそういうあれだから、うーん、そんなにすごい変化ではない、と思いますね」（対象4）

「変わらずですね、特別な事もないです」（対象5）

「（入院している子どもの入院は）家族の間では、当たり前のようになっていますんで、特に子ども（同胞）もあんまり思わないんだろうと思いますね」（対象8）

6. 『気を遣う』

父親は、同胞に対して何らかの良くない影響があると感じていた。その良くない影響は、精神的な部分や、食事に関する栄養面についてであり、父親がさまざまな面から同胞の事を考えていることが窺えた。この思いは父親が唯一、子どもの入院が同胞に与えるマイナスの影響について語ったものであった。

「大人には感じ得ないストレスも感じてと思うんで」（対象2）

「いっつもいっつもみんなおかあちゃん、おかあちゃん、そのおかあちゃんがいらないんですから、そこが一番問題でしょうね」（対象6）

「特にそう思って見た事はないですが、まあその不安定になるような事が時々見られるので、それにはまあ気を遣いますけどね」（対象8）

「バランスの取れた食事っていうのを取らせてやるのが、お弁当選ぶときに、野菜が多いか少ないくらいしか考えないですからね」（対象7）

「出来合いの物買って帰るっていうかたちとかね、家で作ったってたいした物出来ませんから、それが嫌だという事は時々」（対象8）

考 察

子どもの入院が同胞に与える影響について母親に調査した結果、プラスとマイナスの影響があり、父親が同胞の世話をした場合は、プラスの影響が多く、マイナスの影響が少ないことが報告されている（太田、萱嶋、1992）。本研究結果からも父親は、母親と同様に子どもの入院がその同胞に与える影響についてプラスとマイナスの影響があると感じていた。マイナスの影響については、『気を遣う』と感じていたが、『成長に気づく』『良いこととを感じる』とプラスの影響を多く感じ、同胞への思いとして表現していた。

『成長に気づく』では、普段父親が接していない時間に同胞と接することやさまざまな体験を共にすることで、今まで父親の見えていなかった同胞の姿を捉えることができたため、このような思いが表現されたと考えられた。母親を対象とした同胞についての報告の中で、プラスの影響として「お手伝いができるようになった」「自分のことができるようになった」「思いやりができる」などがあげられている（太田、萱嶋、1992）。実際に父親も同様の影響をあげており、母親と同じような視点で同胞を捉えていると考えられた。しかし父親はそれだけではなく、「姉としての自覚が出てきた」「気を遣ってくれてる」などと表現しており、今まで自分が思っていた同胞とは異なった姿を目の当たりにしていたことが窺えた。そしてその姿を父親は同胞の成長と捉え嬉しい変化と感じ、その喜びを素直に受け止めていたと考えた。また、子どもと父親は理性という距離をおいた関係であり、密着した母親との関係とはっきり区別されると柏木（1993）が述べている。このように父親は、1つ1つの同胞の行動を捉え何かができるようになったと評価するのではなく、同胞を総合的に捉え、「自覚が出てきた」「気を遣ってくれてる」と表現していた。

『生活リズムが大切』では、今までは母親に任せていた部分が多かったと思われる同胞の生活を、父親が主体的にかかわる上での思いを表現していた。しかし、これは必ずしも同胞の通常的生活リズムを変えないということではなく、父親の考えるリズム

を大切にしたいという思いでもあり、父親の価値観が大きくかかわっていると考えられた。そのため、日常生活の中で特に設けられることのなかった「汗をかく時間」などの設定がなされていた。このことから、体を使うなど、父親ならではのかかわりを通し、同胞の生活リズムが大切と考え自分らしいやり方で努力する父親の姿が窺えた。そして、父親は自分と同胞の生活を少しでも良いものにしていきたいと思っていると考えられた。

またこの思いでは、入院時間が夜間であったことで、今後はリズムを大切にしていこうと父親が感じ、生活リズムを大切にしようとする、きっかけとなったとも考えられた。

『母親役割の必要性』では、ほとんどの父親は家事が必要だと感じており、実際に担っていることを語っていた。家事は父親が、特に母親が子どもに付き添っている場合には入院直後より分担せざるを得ない役割である(本田, 柴田, 斉藤, 1995)。本研究では、母親は専業主婦が多く、普段父親は家事を母親の役割と考え、母親に任せていたと考えられる。しかし、父親は家事を行うことで同胞の生活への変化を少なくしたいと思い、家事を担っていたと考えられた。また、父親は普段の生活の中では母親の役割とし、自分はあまりかかわることのなかった、同胞とのコミュニケーションにも積極的にかかわっていく必要性を語っていた。これは、父親が家事だけではなく母親の役割を認識していたことの表れだと考えられた。

『良いこととを感じる』は、幼児期の同胞をもつ父親の思いであった。この中で父親が「彼女(同胞・姉)今嬉しいんじゃないかな、自分に1対1でつてくれるから」と語っていた。第二子の誕生は、今まで親の愛情を独り占めしてきた第一子にとっては葛藤であり、同胞が幼児であれば、子どもの入院という状況は弟妹の誕生と似ている(中村, 2002; 下條, 増田, 1999)と言われている。この父親は、姉の葛藤を日頃から気づいてはいたが、普段の生活ではこの葛藤に対しての行動をおこしていなかった。しかし子どもの入院という出来事を通して、父親を独占できるように姉とのかかわりを持ち、そのことで姉が喜びを感じたと思われた。また、姉の喜びを父親が感じとることで父親自身も満足感を得ていたと考えられた。幼児期の子どもにとって母親の不在は大変な事態であり、決して楽しいことではない。しかし、父親は入院を普段同胞が抱いていたと考えられる下の子誕生による不満を解消できる機会とし、母親不在など入院が引き起こすマイナスの影響

も考慮した上でプラスへと転じていけるようかかわりをもった。その結果このように感じたと考えられた。またこの思いは、父親の仕事とも関連していると考えられた。父親は子どもの入院が自分の仕事に与える影響について「仕事と子どものことでストレスがたまる」と表現していた(種吉, 中村, 2003)。子どもの入院期間が父親の夏季休暇と重なる職場が多く、無理して仕事を休むという状況ではない父親が今回の研究では多かった。そのため、仕事への影響をあまり考えずに同胞との生活に集中できたと思われる、子どもの入院を前向きに捉えることができたと考えられた。子どもの入院は家族にとって決して楽しい出来事ではない。しかし父親は、入院により起こる全ての出来事を良くないこととしてのみ捉えるのではなく、あえて普段の生活では出来ないことを同胞と行うことで、良いこともあると考えていた。

『いつもと変わらない』は、学童期以降の同胞をもつ父親が語った思いであった。学童期の子どもの生活は、家庭中心から友だち・仲間へと広がっていく。そこで、同胞は家庭中心の社会だけでない生活を送っているため、家族の変化だけでは「変らない」と父親の目に写ったとも考えられた。しかし、実際は同胞のさまざまな変化を受け止めながらも、変らないようにしたいという父親の思いが隠されていた。そして、学童期の子どもにとって「いつもと変わらない」生活を送ることが重要と父親が考えていることが窺えた。この思いは、あえて違うことを行い同胞を満足させる幼児期の父親と異なる。しかし両者とも同胞のことをよりよくしたいと考える父親の思いがこめられており、年齢に応じた対応を父親が行っていることの表れであると考えた。また、同胞自身が努力していたことも関係していることが予測された。父親は同胞の努力を認め、手助けをし、同胞とともに変らないようにしたいと考えていたことが窺えた。「子どもの入院は特別なことではなく、変化はない」と語った父親がいた。この言葉は、子どもの入院にともなう生活の変化を特別視せず、同胞への影響を最小限にしたいとする父親の思いを示唆するものと考えた。そして、入院自体を特別なこととするのではなく、入院を同胞にも前向きに捉えてほしいという父親の願いが込められていると考えられた。

『気を遣う』では、母親のいない寂しさ、食事に関しての父親の同胞に対する申し訳なさが表現されていた。父親は、同胞のストレスや不安定さを感じ取っていた。また母親は、マイナスの影響について母子分離不安が要因と思われる、「泣く」「(母親か

ら) 離れない」などをあげており(太田, 萱嶋, 1992), 同様の結果を示していた。しかし父親は, それに対して直接的な働きかけはしないが様子を窺っていた。子どもに対して直接的な働きかけはせず, 自分の姿を子どもに示すことが父親役割だと考える父親がしばしばいる(柏木, 1993)という報告が見られていた。このようにあえて直接的な行動はしないが, 父親は同胞のストレスや不安を感じ取り, 軽減させたいと考えていた。母親が入院児に付き添う場合, 同胞の日常生活は食生活に影響を受ける場合が多く, 父親が世話をする場合食事は偏りがちになる(太田, 2002)。これと同様に食事に関して「外食が増える」「弁当など買ってきたものが増える」などと語った父親が多く見られた。食事に関する同胞の健康面への影響を考えた場合, 父親はマイナスの影響があることを認識していた。その上で弁当を選ぶときに「野菜の多いものを選ぶ」「栄養バランスの良いものを選ぶ」などと語っており, 少しでもマイナスの影響を避けようと考えていた。このように父親があげている食事に関する健康面への影響について母親はその影響をあげておらず, この点で異なっていた。母親と同胞との接触は, 面会時などある一定の場面となるため, 母親はその場で見た同胞の姿が特に印象に残ると考えられた。しかし父親はさまざまな場面で同胞とかかわりを持っていた。そして父親は, 同胞の世話を自分が主体的に行っていくために, 食事面でのマイナスの影響をしっかりと認識したと考えた。

以上より父親は同胞に対して, 子どもの入院がさまざまな影響を与えていることを認識していた。その中で普段の生活では感じることのなかった同胞の姿や成長を感じ取り, 今まで気づいてはいたが行動できなかったことを行うことで, 同胞に対してのマイナスの影響を少なくしていこうとして努力していると考えられた。そのため, 父親は子どもの入院を前向きに受け止めることができ, 同胞に対してもマイナスの影響よりもプラスの影響を多く捉えられたと考えた。そして父親は自らが努力することで, 同胞にとってこの経験が今後の生活にも活かされるようにと思っていたことが窺えた。

また, 夜間の緊急入院が及ぼす影響に関しては, 入院時のみ生活リズムが乱れることを気にかけてはいた。しかし, 単にマイナスの影響とするのではなく, そのことを契機に生活のリズムを整え, その結果プラスへと転じているように努力していると感じられた。そして入院後の生活全般においては, 夜間での入院という時間帯による影響は少ないと考えられた。

本研究の限界と今後の課題

入院している子どもやその同胞の年齢もさまざまであり, 発達段階による差異や, 入院前の父親の子育てに対する考え方や取り組み, データ収集期間の多くが子どもの夏休みと重なっていたことなど, さまざまな要因を分析することは困難であった。そのため今後は, 要因を焦点化し調査を行っていくことが必要であると考えた。また, 本研究の結果を踏まえ, 父親のかかわりに関する同胞の思いを明らかにすることや長期入院児の父親の思いと比較していくことを今後の課題と考えた。

看護への示唆

現在, 家族看護という視点からも父親, 同胞への看護支援の重要性が言われるようになってきた。子どもの入院により母親には精神的な支援が必要と考えられており, 母親はその支援を父親に求め, 父親自身も母親への支援を必要と感じている(本田他, 1995; 村上, 1999)。子どもの入院にともない父親は, 母親への支援, 仕事の調整, 入院した子どもや同胞への支援など, さまざまな役割を担うこととなる。そこで最近では父親への支援の必要性について, 看護者は父親のニーズの把握や個別性に合わせた工夫配慮の重要性が述べられてきている(野中, 佐藤, 1996)。しかし, これらは主に長期入院中の子どもの家族への支援であった。

本研究より, 入院後短期間であっても父親は, 同胞に対してさまざまな思いを抱いていることが明らかになった。そこで看護者は, 入院当初から父親の面会時には積極的に声をかけ父親の思いを受け止め, 家族の状況を把握していく必要があると思われる。また, 父親は子どもの入院が同胞に与える影響として『良いこととを感じる』というように, 普段できないことをあえて行うことで, 同胞の満足感を得ようとしていた。看護者はそのような父親の同胞への関わりを理解し, 面会時には同胞の喜びを傾聴したり, 同胞と母親, 夫婦で話をする場を設け, プラスの影響を多く, マイナスの影響を少なくしていけるような支援も必要だと感じた。母親は入院している子どものことは勿論, 家に残された家族のことも気になっている。しかし, 同胞の面会は許可されていない病院も数多く存在するために, 夫婦間の会話が大切になってくると考えた。そのような場の設定を看護者が行うことで, 父親が『気を遣う』食事の事も解決できると考えた。そして何より看護者は, 入院している子どもや付き添いをしている母親のように, 実際に目に留まりやすい対象だけではな

く、短期間の入院であっても影響を受けている家族が存在することをまずは認識する必要性があると考えた。

結 論

本研究では、夜間救急外来受診後入院となった子どもの同胞に対する父親の思いを明らかにすることを目的とし、父親へインタビューを行った。その結果、以下のことが明らかになった。

1. 父親は、『成長に気づく』『生活リズムが大切』『母親役割の必要性』『良いこととを感じる』『いつもと変らない』『気を遣う』という思いを抱いていた。
2. 父親は、子どもの入院が短期間であっても、プラスとマイナスの影響を同胞へ与えると考えていた。
3. 同胞が幼児期の父親は『良いこととを感じる』、学童期以降の父親は『いつもと変らない』と思っていた。
4. 父親は、入院時のみ同胞の生活リズムの乱れを気にしていた。

謝 辞

本研究に協力してくださいましたお父様、ならびにフィールドを快く提供してくださいましたA病院の皆様深く感謝申し上げます。なお、本研究は、平成15年度日本赤十字広島看護大学共同研究費（奨励研究）の助成を受けて行いました。

文 献

- Heaman, D. J. (1995). Perceived stressors and coping strategies of parents who have children with developmental disabilities: A comparison of mothers with fathers. *Journal of Pediatric Nursing*, 10(5), 311-319.
- 本田景子, 柴田典子, 斉藤純子 (1995). 子どもの入院による父親の役割と関わりの変化. 第26回日本看護学会集録 (小児看護), 49-51.
- 柏木恵子 (1999). 父親の発達心理学 父性の現在とその周辺 (第4版). 東京, 川島書店.

- 松原志穂, 成瀬優知 (1999). 小児科夜間診療の需要実態にかかわる研究. *北陸公衆衛生学雑誌*, 25(2), 67-71.
- 村上啓子 (1999). 子どもの入院にともなう父親の役割変化—父母の意識の差を中心に—. *神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録*, 24, 452-457.
- 中村由美子 (2002). 同胞の誕生, 巣立ち, 死別が家族システムに及ぼす影響. *小児看護*, 25(4), 452-458.
- 中野綾美 (2000). 小児看護における家族参加; その意義と課題. *小児看護*, 23(6), 707-712.
- 大久保成子, 井口絹枝, 山岸美千代 (1996). 救急外来における母親の意識調査. *川崎市立川崎病院院内看護研究集録*, 50, 126-134.
- 太田にわ (2002). 入院児への母親の付き添いが同胞に及ぼす影響と看護ケア. *小児看護*, 25(4), 466-471.
- 太田にわ, 萱嶋淑子 (1992). 小児の母親付き添いによる長期入院が家族に及ぼす影響—第一報: 家に残された同胞への影響—. *看護展望*, 17(4), 94-98.
- 柴原麻佐子, 深瀬和美, 小山茂子 (2002). 母親が付き添う入院児の同胞の看護ケア. *小児看護*, 25(4), 422-429.
- 下條美芳, 増田敦子 (1999). 長期入院児に母親が付き添うことによる同胞への影響—子どもの様子とTK式診断的新親子関係検査による考察—. *小児看護*, 22(4), 501-508.
- 田原 遒, 橋本光司, 大久保 修, 高橋 滋, 原田研介, 関一郎 (2001). 小児科救急患者数の変遷と初期救急輪番制の検討. *小児保健研究*, 60(5), 625-629.
- 田中千代 (1998). 家族システム論から考える父親の役割. *小児看護*, 21(7), 831-835.
- 種吉啓子, 中村慶子 (2003). 慢性疾患を持つ子どもの入院にともなう父親の思い. *日本小児看護学会誌*, 12(1), 23-30.
- 辻 淳, 岡野善行, 新宅治夫, 一色 玄, 村田良輔, 鶴原常雄, 上野成子, 大笹幸伸, 舟本仁一 (1996). 大阪市における小児夜間救急医療について. *日本公衆衛生雑誌*, 43(10)Ⅲ, 121.
- 筒井真優美 (1993). 小児看護をめぐる親の意識と実態. *小児看護*, 16(8), 1012-1016.
- 筒井真優美 (2000). 病児をもつ家族を理解する家族の状況を理解したアプローチ. *インターナショナルナーシングレビュー*, 23(2), 47-52.
- 渡部誠一, 福田睦夫, 渡辺章充, 前田浩利, 清水純一 (1998). 24時間小児救急を行って. *茨城県救急医学会雑誌*, 22, 164.

The Feelings of Fathers toward Their Other Children when One Child was Admitted to Hospital at Night

Kimiko TAGAWA *

Abstract:

The purpose of this study was to clarify fathers' feelings toward their other children when one child had an emergency admission to hospital at night. Using a semi-structured interview, 8 consenting fathers were interviewed. The feelings expressed by these fathers may be categorized as follows:

1. Fathers became more aware of the sibling's development. 2. They realized the importance of maintaining daily routines. 3. they realized the importance of the mother's role. 4. In the case of fathers looking after pre-school age children, they could find pleasure in taking care of their children. 5. In the case of fathers looking after elementary school age children, life went on as before with no apparent changes. 6. They became more aware of their child's emotional states and general well-being.

The study revealed that fathers believed that their child's emergency admission to hospital, even for a short period of time, would have both positive and negative effects on their other children, and that fathers were worried about disruption to the rhythm of their other children's lives. These findings suggest that nurses need to understand that, in cases of a child's emergency admission to hospital, fathers have strong feelings toward their other children.

Keywords:

Emergency admission , sibling, fathers' feelings

* The Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing